大正天皇御製歌集

下

311
114

始

宮内省図書寮 寄贈本

大正天皇御製歌集巻下

大正四年

戦中新年

軍人くよのつとめにとうつ銃の煙のうちに年立ちにけり

新年鶏

ほからかに歌ひあけゝる鶏の群のうちにそ年ハ立ちける

若水

年立ちてまつ汲みあぐる若水の汲める心を人ハ持こなむ

山霞

あし〳〵の伊豆の山々ハつくともわの汲霞の立ちかくくる

待鶯

春ことにこのみにせる鶯の聲きかむ日のまち遠き哉

夕鶯

梅の花さけつ岡辺にこ汲めハ夕日をあみて鶯の鳴く

311
114

野梅

霞みつゝあけ行く野辺に鶯の聲をきこえて梅のをるなり

春雨

風ひえしまゝ柳に絹霞かゝるとみれハ春雨そ降る

躑躅

のる汽車の窓よりみれハ紅に山いろとりてつゝし花咲く

路卯花

時鳥こゑれて来る山陰の跡ハうつきの花さかりなり

庭新竹

吹上の庭の弁の子ハいつのまに御さ孫まて伸ひ立ちにけむ

時鳥

雨はれて月のかけさえ渡殿にやゑしるひされハ鳴く時鳥

梅雨

餘りにもふる梅雨のはれ久しくて思ひやらるゝ民のなりはひ

池螢

照る月もさゝぬ木かけは池水のありとみせても螢とふなり

夏月

かゝり火を庭に焚かせてわかしよによりて月みる山のけのいほ

水邊夏月

衣手もしふきまぬかれて大谷川月夜涼しく岸つたひせり

鮎

山百合の花もうたれつ谷川のいはまを鮎のみほり行く夕日

夕顔

あつしとて水そゝかせし庭のおもに涼しく咲けり夕顔の花

茄子

鉢うゑにうゑて茄子も賤の屋の畑におとらぬ実をも結へる

あつさ堪へかたき日に

民草を思ひこゝろにやれまつりこと出てきくまも暑きこのころ

國民の上やいかにと思ふまはあつさもしはしわすられにけり

夕立

ほと近きいなかの山も見えぬまて夕立いなり田母さはの里

松風涼

夕されは蝉のなくねもしつまりて吹く風涼し松の下行

海水浴

みるからにいさましけなる荒浪にうきしつみして泳くやからは

ことも〳〵手を取りなから親をよひしほあみなり浦の
遠あさ

あつとき尓

泉の清きなかれを絹多ゝきてハ涼ますやの心か秋

池上の里尓て

あつし尓かそはさの山もほの見えて吹く風涼し池上の里

炎天

草刈も木かけゝいりていこふなりあつさはけしき夏の日
さかり

雷

鳴神のおと近つきぬ山のはよ一村雲の立つと見しまよ

夏絹

うるこみれおくに泉のおともして吹く風涼し絹屋のには

麦

この年ハいかにと思ひし麦のほのみのりゆたかにみゆる山はた

昨日まてほしつゝなき取りしつはものゝもとかよふつひて畑の麦
かる

うなゐらに昔のことを聞かせつゝ麦粉ひくなりさとの老人

虎耳草

つき山の岩根めぐりてゆきのした真白に咲けるいろのくはしさ

釣忍

吹く風に露もこぼれて夕ぐれの軒はゆかしくなりしのぶかな

新秋

大谷川ながれの音と秋めきておく露しげし庭のあさぢふ

馬上聞蜩

もり陰に駒をやすめて風まては涼しくきこゆひぐらしの聲

萩花

さゞれしく流を越えて萩の花咲きつゝみだり田母沢の庭

山寺萩

墨染のゆふべを告ぐるかねの音に小萩花ちる山寺のには

朝顔

これとりて庭につくれる朝かほの花さくころは朝いせられけれ

野径薄

吹く風に薄みたれてさきに行く人のはのこの道かくれける

藤袴

紫のいろなつかしき藤袴けふかく立てり庭のまかきに

草花

すゝきとの鹿のかけさへ見えぬまて咲きみたれけり苑の八千草

園守か心つくしをさまくの色にみせても咲ける秋草

草花徐開

秋風の吹きそめしよりいつとなく庭の千草そさきそろひける

行路虫

村雨のはれし野道をわけ行けはくれぬさきより虫そなくなる

野分

やむへくもあらぬよひの野分かな庭の木立を吹きしをりつゝ

関路塵

もる人もあらはになりにし関なれハつまとふ塵もや吹こゆらむ

山家月

ふもとにて誰かなかむらむわか山の松にかかれるもち月のかけ

絹霧

高殿の窓に絹目はにほへとも松原くらく霧立ちやる

擣衣

里人の上を思ひてねふられぬ枕にひひくさよきぬたかな

菊花初開

うれしくも吾か代を祝ふこゝちして園生の菊そかをりそめける

秋野

萩は秋風になひきて分け行かむ方もわかれぬ秋の野辺かな

秋鳥

色つける庭の柿の實ついはむと今日も日くらし小鳥よりくる

をりにふれて

てる月のひかりとくみて渓川の水の音高し山のけの庭

萩の花つゆよこわめるあけ方は庭おもしろし月そのこれる

田氷

あさけ寒柴山の里もこの冬は田のもこほりて寒さおほゆる

冬風

千鳥立つかけ寒き松原の霜さちらして北風ぞ吹く

厳寒

冬ふかみ庭の池水いつもなほこほりてよにいく日経にけむ

葉山にて

雪白き富士の高ねをあさしに見渡す宿そたのしかりける

澗戸雲鎖

山鳥はよこかへらぬ谷の戸をはやくも雲のとさしはてつる

山路苔

ふむ人もなきおく山のかけは路朽木の岩の苔のむしつる

樵路雨

柴人のかへる山路雲とぢてさびしくそゝく雨の降る

海

あけ朝に風さそひて相模かたよせくる波のあらくもあるかな

海上雲

遙く一村雲そうかびけるこの朝なきや風に雑るらむ

夕陽映島

はるかなる沖の浪間のはなれ島夕日をうけてあらはれにけり

湊

仇浪ハしづまりはて、軍艦又なかへり来ぬくれの湊に

海路

雲はれて風もなきうる海原をこひろくも行くふな路かな

湖上眺望

釣舟もあまたうかへり近江のあはうみの高峯のはれわたる日は

岸頭待舟

渡舟かへつ待つまの長さかなむかひの岸ハ遠からねとも

池水浪静

あしたつの千代のかけこそうつりけれ浪しつかなる池のみきはに

城

よしあしをとのちからのかきりいくさひし昔を語る大阪の城

山家煙

山かけは明みつ雲の絶間より一筋白くけふり立つみゆ

鐘聲

暁のかねのひゝきをきゝなから旅立つ時そ床しかりける

群鳥群しつまりし山もとの木のまにひゝく入相のかね

和布

白波のあらひしわかめ今日もまたわかの夕みけにもて参らむ

浪あらきいその岩間にあまの子か和布かるらし船よするみゆ

鷲

いつよりやつかりけるものにこそあら磯崎に立てるわし

鳩

はとの餌をあさる群になり小雨そほふる庭の芝生に

蝸牛

村雨にぬれつる庭の竹垣をしつかにのほる蝸牛かな

這ひし跡さやかにみせて蝸牛いつこに今はかけをかくしそむる

刀

磨きあけしたるつるきを床にかさらせて明暮に身の守りとそする

筆

なかくに新しきよりも手馴れたるふてこそとしは書きよかりけれ

心静延壽

村肝の心しつかに持ちてこそ千代の齢を経ぬへかりけれ

しつのや山の姿を心にてあらはよはひも延ひさらめやは

をりにふれて

年ことにことはのりくにと集ふ人ともに力をつくせとそ思ふ

樵客帰里

こりためる真柴をせには負ひなからつかれも訪くかへる山人

川狩

松の火もかすくみえて賤の男の川狩すらし瀬の音きこゆる

老人をみて

老人のおとろへはてしさまみれはあなあはれとも思ほゆるかな

齋部廣成

ふることを書きつらねたる家の風おこさむとせし人をしそ思ふ

大正五年

野鶯

鈴菜咲く春の野路をゆきくれハ霞のおくに鶯のなく

菜山尓て

梅の花ゆふへの風尓散りしきぬ庭のおもても白くなるまて

菜山尓ありて

鶯の聲ハきかねと呉竹の東山の里ハ梅さかりなり

月前花

さくら花咲きのころぬとうれしきに今宵は月もかくはさりけり

梨花

軒近き山梨の花咲きしより夕くれしるき窓のうちかな

燕

網しほのいり江の岸の柳原しゝほとみえて燕とひかふ

禁苑躑躅

苔むせるいはほにほひてもえくつゝし花咲く雲の上の庭

岩つゝし花咲きにけりみきはの水清くなかるゝ庭の松かけ

藤花映水

藤の花さきこそかゝれうちはれて若鮎はしる谷の流に

燕子花

白鷺のいとつなかりみるあさ澤に色つるほしき燕子花かな

新樹

朝ぼらけ露にもこぼれむこちたく瑞枝さし添ふ玉かしはかな

ほとゝぎすをきゝて

谷川の水音きゝて行く道の杉の梢に鳴くほとゝぎす

百合

こがくれに白きは百合の花ならむおもや立ちこむる谷かけの道

簾外蛍

夕立のなごりかわかぬ高殿のをすは蛍のひとつ飛びゆく

蚊遣火

ひと筋の蚊火のけぶりもなびくなる月におもしろき小田の伏庵

蓮露

夕立の後きよし池のはちすは葉に涼しくのこる露のしら玉

夕顔

すゞしさをさそひて咲きつる遣水の音きく庭の夕顔のはな

夕立

庭木みなぬらしもはてゝ晴れにけり待ちにまちつる夕立のあめ

あるときさよ

ひるもなほ蜩鳴きて吹く風に露は玉散る杉のしたみち

夜風

うゑ渡す山田のさなへなびかして涼しくかよふ夜の網かせ

夏夕

遣水のおとながら今日もまつ夕涼みする庭の木のもと

夏水

みな月のてる日さかりも山川の音きく宿はすゞしかりけり

残暑

秋くさの花はさかりになりぬれど夜よりあつき日のおほくて

薄

穂に出しひと村すゝき細風にかつなびきして露のこほさき

汽車中富士を見て

こゝちよく晴れたる秋の青空にいよゝはゆるふしのしら雪

冬月

降りつもる雪をてらして十ものはく月こそさゆれ吹上の浜は

樹間冬月

かれ芝の霜をてらして裸木の梢にさゆるありあけの月

霜むすふかゝことゝ汐の松の上さしほりてのはる月のさやけさ

絹千鳥

大ゐ河絹風さむみもみち葉のちりつくふちに千鳥しは鳴く

池水鳥

中島の松のかけみる池水にをしそうかへるさまかけること

柴

大原女か頭に柴をいたゝきてかも川つたひひとり行くみゆ

嚴寒

こゝかゝく寒きけさかな筆をもつおよひの先も氷るはかりに

某山にて

とりくにしける小松のかけしめて咲きこそにほへ水仙のはな

あるとき

谷川の水のおとのさやかにてあさもや深し杉のしつえち

海眺望

大空のみどりにつゞく海原のひろくひろくに見ゆる今日かな

讀書

いとまえてひとりひもとく書の上に昔のことを知るかたのしさ

寄國祝

年ごとにわが日の本のさかゆくもいそしむ民のあればなりけり

日の本の國のさかえをはかるにもまなびの業ぞもとゐなるべき

大正六年

海上霞

よさの海の霞のおくになりにけりさやかに見えし天のはしたて

若草

春雨のはれし野中にうるはしくふつ紫かくもゆる若草

菜花

ひとすぢみ川のながれを絶間にて鈴菜さきつる廣き野原に

蝶

うち霞む畑のはたなの花の上をはなれし色なるてふとふみれは

よもき

春の野につみしよもきやおくらせけり老をやしなふ臣のもとより

よもきつむうちきの影もほのみゆるのとかに霞む吹上の浜は

蕨

吹上の花に見に来てつれしくも初蕨さへ折りてけるかな

花

うるはしく吾日の本をかさりける花にそ春はみるへかりけれ

夕花

夕つく日しつみはてたる山もとになほくれのこる花の色哉

苗代

さくら散る谷のなかれをせき入れて苗代つくる山もとのむら

苗代の水ゆるかにもみゆるかな引くしめ縄のひくくはかりよ

山吹

中島の若葉かくれよ山吹の花さき出て春しけふけり

若鮎

藤波の花のかけみる山川の清きなかれに若鮎さはしる

春曙

百千鳥かすみのうちに鳴きいてゝ花よりしらむあけほのゝ空

あけ渡る浦の松原うちかすみ波のひゝきものとけかりけり

春河

青柳のけふりもやりも見ゆるかな春風ぬるむ野辺のかはなは

春磯

白波の寄せてはかへるこて石のいそみみるめも春めきにけり

をりにふれて

さくら咲く庭の芝原うなゐこのつなひく鞠のにきはしきかな

夏の初の歌の中に

時鳥なかむけり今日も見ゆるかな花ちりにしは昨日と思ふに

新樹

夏山は若葉のほかの色もなき花見しかけはいつくなるらむ

卯花

こゝかしこ卯の花白く見ゆるかな青葉をしく木々くれの庭

棟

露はらふあらしの風にあつまやの軒のあふちの花そこほるゝ

螢

石山の螢はなちて夕まくれやのほとりをめくる楽しさ

夏月

螢とふひかりは消えて草川の流をてらす月のさやけさ

梔子

梔ここゝ庭めくりて見つるかな露のよかさの梔子の花

夏草

ひる顔の花とまじりて夏草のところせきまでしげる庭かな

鵜川

かのあかり鮎やよる〳〵むさゝ下す舟のかゞり火はしうごかす

蓮

釣殿のすだれまかせて風渡る池のはちすの花をこそみれ

白雲のかげのうつろふ池水にはちすの花の散りてうかべる

扇

手にならす扇の風もあつき日は門守る人のつらさをぞ思ふ

風をおこすうつはとあれど昔よりなれし扇を親まれける

泉

山かげの岩間のしみづくむ袖に涼しさそふる松の下かぜ

晩夏

夏もはやかぎりなるらむ山川の岸のわさはぎ花の咲きける

夏朧

ふところ山あさ葉かくれの瀧つせを駒の上より見るに涼しき

夜露

鳴く虫の聲を聞むとかり立ては夜露に涼しき庭の芝はら

月かけハ松のあなたにいてぬらし庭の芝生の露そきらめく

田家秋風

群雀さわく門田のいねの上に夕日のこりて秋風そ吹く

對月

おほ水にひたりし茅屋のひつゝ語りふかす月にむかひて

馬上月

月のてる野辺の松原おもしろし吾のる駒といさみ立ちつゝ

残月

とく起きて山のは見れハうく霧のうちにのこれり有明の月

汽車の中にて

薄くこく紅葉にほへる箱根路を行く〳〵みるかおもしろきかな

時雨

窓のとの萩の枯葉におとつれてけさめつらしく時雨ふりきぬ

社頭氷

ひろ前に群れゐるはふりも寒けにてこほりはてたりみたらしの水

遠山雪

雪白きふしの高根のみゆるかなかこ所の松のこすゑに

絹けいく里の煙のたえけれと雪さやかなり遠のやまなみ

爐火

埋火に炭さしそへて寒き夜をひとりしつかにふみを讀むかな

夕陽

群雀ねくらあらそふ竹村のおくまであかく夕日さすなり

富士のかつる

はれわたるふしの高嶺を絹なからな君窓近くみつかなさ

野径

学舎ハ遠くやあらむ手綱よりて野道をいそぐうなゐ子のむれ
松すけの道しるへ石苔むしてゆふへさひしきのへの追分

天盃

今日のよふれはみ盃さかへ君に添へつ忠と臣ハ酌むなるを

綱

山川をさかのほり行く船みれハ綱そ筋そいのち維りける

幼児

しはらくハ世のうきことも忘れけり幼き子らか遊ふさまみて

李王の國にかへり玉ふわかれに

あまのひかなれとねのふかれ風さへ絶えぬ梅雨のころ
十とせてふつとひ會ひし君にまつ別つゝ今日ハかなしかりけり

大正七年

立春霞

春は立つあしたのとかより鳴きて野路の松原霞たなびく

餘寒

水仙の花つなかれて春風のよしさえかへる絹窓のまは

梅

あ京もかくみ渡りてのとかなり柴山の里は梅かをりたり

朝雉

朝日かけのとかに霞むなるはのいつこなつさむ雉の聲ぞする

吹上のもり吹きわたる朝風につほきこほれけさぞ鳴くなり

夜花

おほろ夜の月もにほへつ吹上のさくらのもとに歌思ふかな

松間花

さかりなる花ほの白く見ゆるかなあけわたる行く松の木の間に

落花

吹上の芝原行けはいはことも知らぬかつより花のちり来る

夕落花

群鳥ねくらあらそふ山もとの杉のひまより花ぞちり来る

苗代

雨はれしあしたの風に苗代のみなくち祭るしめなひく雑り

池燕子花

かきつはた色あさやかに咲きにけりみくさ生ひしける池の片岸

春池

のとかなる春の日かけにいろくつのうかひいつらん庭の古池

春磯

さくら鯛つる船遠くみえにけるかな網目かくるる磯つたひして

春海

よる波の音もおとせすなりにけり霞みはてたる春の海原

残櫻

葉になれる蕨しみゆる山道の木のまにのこる山櫻かな

新竹

すたちくる雀のひなの群として庭の若竹つかにしわめり

一村の庭の若竹夕月のくまとなるまて延ひ立ちにけり

梅雨

椎の花こほるる軒の梅雨に書よむ窓もいふせかりけり

梅雨晴

梅雨もかきくらすなるしの又雲の絶間にほのかけみゆ
よ茶ほとゝ今手ふりて梅雨のあまそてちよくはれ涼しる

水鶏

夜あみつゝ舟はかへりて水鶏なく群しきりなり岸のあし原

星のかけさひしくうつれる山沢のあし原かくれくひな鳴くなり

水辺蛍

さゝ波をほのかにみせてやとの池はしよ近く蛍とひかふ

池上夏月

浮草の花咲く池を吹く風につゝよふ月のかけの涼しさ

庭夏草

よはにみし蛍は消えて網露の玉とひかれる庭の夏くさ

やりみつ

夕まくれ青葉うこかし風立ちて月もたゝよふ庭のやり水

夜風

釣とのに月待ちをれはちすはの露さこほして夜風そふく

かけ渡す軒のいよすのひまもりて吹く風涼し園のあつまや

夜浅流

老杉の木のもとめくる浅水の音をきゝつゝ今日とくらしつ

夏燈

夕くれの軒のともし火吹く風にをりくゆらくかけの涼しさ

露滋

てる月のひかりに見れは鳴く虫の声よりしけくさかるの露

月前陳思

さやかなる月にむかへはなかなかにこゝろくもる昔しのひて

天の下くまなくてらす秋の夜の月を心のかゝみともかな

葉山にて初雪ふりけるあした

今朝みれは初雪白くちもりそり庭の梅の枝いはほの松はら

薪

大原女かいさおろしていふなり絹霜白き賀茂のつゝみを

禁苑春近

吹上の庭の松原ほのかにもかすみなびくは春ちかみかも

雲

紅のくもうるはしくみゆるかな白帆つらなる波路はるかに

家

外國のさまをうつせる家もあれど泉つくりぞゆかしかりける

田家鶏

庭つとり門田のくろにひなつれて餌をはむ様のむつましげなる

海辺松

しほ風のかよふにこへて枝ぶりのみななびくまゝはまべの松原

衣

たらちねのみおやの衣さらしつゝうら悲しさのまさる頃かな

大正八年

森藤

千年へし杉のむらたちくらけれとさやかに匂ふ白藤の花

初夏風

はら〳〵と若葉の露を吹はらふ風こゝちよき此の朝かな

朝晴雪

ゆふかけも雪そはれし花つあきつ島めくりの海は朝なきにして

夜雨

降る雨の音さひしくも聞ゆなり世のこと思ふ夜はのねさめく

大正九年

萩稍綻

秋風ハいよう吹くともたほゞねとほころひそめつ庭のいと萩

落葉

園守かおち葉かきやる音になりねさめぬ床も寒さあしこよ

田家早梅

白菊のかをるかきねにつもりけりちりし紅葉を風のよせけむ

冬なから垣根の草も萠え出て田中のいほの梅の花さく

はる待ちて梅こそにほへはりての畑のくになに霜はおけとも

冬湖

富士の峯は雪よりおろす木枯に夕浪高しあの水海

夕雨

かきくらし雨降り出てぬ人にくくちゆく世をさなけくやらん

猫

國のまもりゆめわするな子猫すら爪とく業は忘れさりけり

大正十年

社頭暁

神まつるわか白妙の袖の上にかつうすれ行くみあかしのかけ

附載

日韓國協約

日の本と韓のちきりを結ひしハ藤のかつらのちからなりけり

右明治三十八年十一月伊藤侯爵尓下し賜へる

老翁

山のこと高さよはひを重ぬれと若さそをしの心そをしき

右大正六年四月六日山縣元帥尓大正六年

五月十八日東郷元帥に大正六年六月十一日
大隈侯爵に下し賜へり

爐火

埋火のもとによりそふ心よもなし世のためはかる事多くして

右大正八年十月山縣元帥に下し賜へり

島松

浪間よりいづる朝日の紅にみどりそはゆる島山のまつ

右大正九年十二月十七日松方内大臣に
下し賜へり

昭和十九年三月二十七日奉旨

昭和二十年十一月　編成

宮内次官　臣大金益次郎

御歌所長　公爵　臣三條公輝

皇太后宮大夫　臣大谷正男

侍従次長　伯爵　臣甘露寺受長

圖書頭　臣 池田秀吉

御歌所寄人　臣 千葉胤明

御歌所寄人　臣 鳥野幸次

御歌所寄人　臣 武島又次郎

御歌所寄人　臣 遠山英一

御歌所主事 伯爵　臣 庭田重行

御歌所参候 子爵　臣 北小路三郎

御歌所参候 男爵　臣 藤枝雅脩

宮内事務官　臣 本郷定男

元宮内次官 男爵　臣 白根松介

元圖書頭　臣 金田才平

2636

終